

八幡工高新聞 2年連続 年間紙面審査賞優良賞受賞 ～新聞部全国総文体験レポート～



↑東京のシンボル「東京駅丸の内駅舎」を正面から 撮影：副部長(川)

(川)の班が作成した交流新聞→

7月31日から8月4日まで、高校文化部のインターハイである「第46回全国高等学校総合文化祭とうきょう総文2022」が開催された。新型コロナウイルス第7波の影響で直前まで開催中止も懸念されたが、感染対策の徹底により無事開催された。

新聞部門は8月1日から3日までの開催で、年間紙面審査賞の表彰と交流新聞制作が行われた。今回は3年生副部長(川)とイラスト担当2年生(健)が大会に参加した。盛夏の東京で繰り広げられた、新聞部員たちの熱い青春の様子をお届けする。



↑このときはまだ元気。八工新聞部コンビ

新聞部門では、年間紙面審査賞最終審査が行われた。昨年一年間で制作した新聞すべてが審査の対象だ。本校新聞部は、昨年に引き続き優良賞を受賞することができた。

新聞部門三日間の活動のメインとなるのは、交流新聞の作成だ。まず全国の新聞部員5名程で班を組み、取材を行う。今回は「修学旅行とは違った東京」をテーマに、11の取材コースが用意された。取材後は、A4両面の手書き新聞を制作する。楽しく観光できるのかと思



↑交流新聞編集会議の様子



いきや、実はとんでもなくハードなスケジュール。交流会や生徒活動報告、表彰式などもあり、新聞制作に割り当てられる時間は編集会議を含め5時間ほど。担当する記事は宿題として持ち帰る。深夜のホテルで徹夜上等の心積もりで作業をする。実際に副部長(川)は午前3時半まで、イラスト担当(健)は朝5時過ぎまで作



↑本校新聞部イラスト担当2年生(健)が交流新聞のために描いた4コマ漫画「新聞輪転機」とうきょう総文公式キャラ「ゆりーと」が主人公。はっちークイズもぜひ読んで答えを見つけてね。

はっちークイズ

問題 左の4コマ漫画は、イラスト担当(健)が交流新聞で担当したもの。みんなが編集段階で目を通し、最後の講評でも褒めていただいたのですが！実はこの中にとんでもなく重大な間違いがあります。それは何でしょう。ちなみに、帰りの東京駅の土産物店で、同じ班の人に教えてもらうまで全く気づきませんでした。 答えは7面左下を見てね。

読売新聞本社へ潜入取材

ためになる事柄を誰にでもわかるように

本校新聞部イラスト担当2年生(健)が訪れた取材コースは、読売新聞本社。発行部数が世界最多の新聞としてギネスブックに認定されている、あの読売新聞だ。

記事を書くのはちよつと苦手、いや大いに苦手な2年生記者(健)の読売新聞本社満喫ツアーを紹介する。

ビルがとて高かった。ロビーも天井もとて高かった。警備員の数にも圧倒されながら、社屋を見て回った。

でかかた「コボちゃん40周年」の垂れ幕。カラー印刷の仕組みの体験スペースでは、青・黄・赤・黒のパネルを重ねて色をつくりだしていた。非常にカラフル。色の世界は奥が深い。

そして、4コマ漫画(左に掲載)にも書いたが、新聞輪転機の1/20スケールの模型に感動。ぐるぐる回り、光り、

我々に届く新聞がこのように印刷されているのだと、とにかく楽しかった。

取材もさせて頂いた。読売新聞のはじまりは瓦版だ。江戸時代、町の人々に世の中の出来事を分かりやすく伝えたのが瓦版。江戸の町で記事を読み上げながら売られていたから「よみうり」と呼ばれるようになったという。

「ためになる事柄を誰にでもわかるように」読売新聞に込められた作り手の想いと、その歴史を感じた。

読売新聞には「ジュニアブレス」があるのはご存知だろうか。読売新聞が運営する子ども記者団がつくる新聞だ。取材したいネタを自分達で企画書に書いて提出し、取材して新聞制作・発行をしている。取材会場で「こんにちわ！」と我々そうぶんな取材班を迎えてくれた彼らは、読売新聞「ジュニアブレス」高校生記者たち。小5〜高3生が選ばれる現在35名で活動している。凛と立ち並ぶ姿は社員と見間違えうほど。同年代の未成年の目線で書かれた新聞は、特に高校生として心惹かれる内容ばかりだった。

(健)



↑とうきょう総文公式キャラのゆりかもめの「ゆりーと」

スポーツ祭東京2013の公式キャラクターとして誕生し、今回の総文でも「活用」された。ちなみに、弟・妹もいて両親や祖父母キャラクターも存在する。

スポーツキャラなのに文化祭の公式キャラとはこれいかに。